

短 報

アールラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に
関するケース・スタディ

A Case Study on Learning and Teaching Support Provided
by Earlham College Library

長 澤 多 代
Tayo NAGASAWA

Résumé

Purpose: The purpose of this paper is to explain the content and context of learning and teaching support provided by Earlham College Library as part of a series of research projects on the educational function of college and university libraries. The Earlham College Library was selected because it has provided diverse programs to support learning and teaching since the 1960s and its practices have influenced many college and university libraries in the U.S.

Methods: This research conducts a descriptive case study presenting a detailed account of the learning and teaching support provided by Earlham College Library. The data are interview data, archival records, administrative documents, reports, dissertations, data on physical artifacts, and observational data.

Results: Programs to support learning and teaching are initiated to respond to the actual and potential needs of clients and to integrate library programs into existing services provided by the college body. The programs use techniques such as repeatedly publicizing the existence and the educational role of the College Library and its reference librarians and providing support to courses in which research papers have been assigned. In terms of programs that support learning, it was found that undergraduates appreciated course-related instruction on specific topics, but were not as likely to accept similar instruction for multiple courses or course-related instruction on general topics. Faculty members were found to recognize an improvement in the quality of their student's performance as a result of their enhanced information retrieval skills. The evaluation of programs that support teaching revealed that faculty members were able to develop a clearer sense of the role of the College Library and its reference librarians in the educational system.

長澤多代: 長崎大学大学教育機能開発センター, 長崎市文教町 1-14

Tayo NAGASAWA: Research and Development Center for Higher Education, Nagasaki University, 1-14 Bunkyo, Nagasaki 852-8521, Japan

e-mail: nagasawa@nagasaki-u.ac.jp

受付日: 2006年12月18日 受理日: 2007年3月21日

In the future, the results of this case study could be used to devise a conceptual framework for collaboration between faculty members and librarians.

- I. はじめに
- II. アールラム・カレッジと図書館
 - A. カレッジの概要
 - B. 図書館の組織と運営
 - C. 図書館が実施する学習・教育支援の組織と運営
- III. 図書館が実施する学習支援
 - A. 学習支援の概要
 - B. 新入生オリエンテーションにおける学習支援
 - C. 学科関連の情報利用指導
 - D. 基礎科目における学習支援
- IV. 図書館が実施する教育支援
 - A. 教育支援の概要
 - B. 新規採用教員の候補者との面談
 - C. 新任教員への図書館サービスの案内状
 - D. 新任教員への図書館ガイダンス
 - E. 教育改善ワークショップ
- V. 図書館が実施する学習・教育支援の評価
 - A. 学習支援の評価
 - B. 教育支援の評価
- VI. おわりに

I. はじめに

1990年代に入って、18歳人口の減少、政治経済や教育研究のグローバル化の進展を背景として、日本の大学では、大規模な改革が進められている。この改革の特徴は教育内容や教育方法を大幅に見直す教育改革であることにある。その一環として、大学図書館（以下、図書館という）では、学習・教育支援機能について検討することが求められている。

図書館の学習・教育支援に関する活動には、学生の学習活動の支援（学習支援）、教員の教育活動の支援（教育支援）がある¹⁾。学習支援及び教育支援の目標は、学生及び教員が、図書館の学習・教育支援機能について理解し、各々の立場から図書館の効果的かつ効率的な利用法を習得することにより、学習・教育活動を質的に向上させることに

ある。大学教育における学習・教育支援のあり方を研究することは、大学における図書館の役割を検討する上で重要である。

従来、学生や教員の図書館利用法の習得については、主として、図書館員及び図書館情報学の研究者が図書館利用教育に関する研究の中で検討してきた。図書館利用教育の主要な研究課題として、「授業と図書館の結びつき」²⁾や「学習支援における教員と図書館員の連携」³⁾がある。これらの研究をもとにして、筆者は学習・教育支援における教員と図書館員の連携に関するケース・スタディに取り組んできた。

本稿の目的は、大学の教育活動における教員と図書館員の連携を分析する出発点として、記述的ケース・スタディによって、アールラム・カレッジ (Earlham College) の図書館が実施する学習・教育支援の全体像を明らかにすることである。アール

ラム・カレッジを研究対象とする理由は、アーラム図書館が、1960年代から積極的な学習・教育支援を実施してきたこと、ワークショップ⁴⁾や事例発表⁵⁾によりその成果を発表して米国の図書館に影響を与えてきたことにある⁶⁾。

アーラム図書館が実施する学習支援について、米国では、アーラム・カレッジの図書館員や教員のほか多数の図書館員及び図書館情報学の研究者が論じてきた⁷⁾。学位論文の調査対象にもなっている^{8)~11)}。だが、これらの先行研究は、主に学習支援を対象としており、教育支援についてほとんど論じていない。他方、日本では、米国において定評のあるアーラム・カレッジの取り組みがほとんど紹介されていない。以上の理由により、アーラム図書館が実施する学習・教育支援の全体像を明らかにすることは有意義と考えられる。

本稿の特徴は、全面的に記述的で、理論構築を目的としない記述的ケース・スタディの手法を用いていることにある。記述的ケース・スタディの有用性はほとんど調査が行われていない領域の基本的な情報を提供することにある¹²⁾。本稿によって、図書館員及び図書館情報学の研究者が学習・教育支援を研究・実践するための基本的な情報を提供することができると考えている。特に、教育支援について、日本ではまとまった記述がほとんどみられないために、本稿の意義はその情報を提供することにあると考えている。

アーラム・カレッジでは、4回の訪問調査を実施した。第1回は、2004年3月29日から4月1日、第2回は2004年5月18日から21日、第3回は2005年6月30日及び7月1日、第4回は2005年9月19日から28日である。対象とするデータは、アーラム・カレッジ関係の一次資料及び二次資料である。具体的には、次のとおりである。

- ①学習支援もしくは教育支援の経験を持つアーラム・カレッジの図書館関係者（図書館長とレファレンス係員）及び教員の聞き取りによって得られた情報¹³⁾
- ②アーラム・カレッジもしくはアーラム図書館関係の資料記録、管理文書、統計資料、広報

誌の掲載記事

- ③アーラム図書館の学習・教育支援に関する事例報告・雑誌論文・学位論文・書籍、アーラム・カレッジの教育に関する雑誌論文・書籍
- ④学習支援もしくは教育支援に利用している物理的環境 (physical artifacts) に関する資料記録及び観察記録
- ⑤学習支援及び教育支援の直接観察によって得られた情報

本稿はVI章からなる。第I章では、研究の背景、研究の目的と方法、対象とするデータについて説明している。第II章では、教育活動や図書館活動を含むアーラム・カレッジと図書館の基本的な事項について解説する。第III章では、学習支援の現状と背景を明らかにし、第IV章では、教育支援の現状と背景を明らかにする。第V章では、学習・教育支援の評価を明らかにし、第VI章では、全体を要約して今後の課題を述べる。

II. アーラム・カレッジと図書館

A. カレッジの概要

アーラム・カレッジはインディアナ州のリッチモンド（人口38,000人）にある4年制の私立の教養カレッジである。フレンド会が1847年に創設した。教養カレッジの全米ランキングでは、第65位になっている¹⁴⁾。

アーラム・カレッジには、学生（学士課程）が1学年あたり約300名、教員が約100名、職員が246名いる¹⁵⁾。学生は全米から集まっている¹⁶⁾。留学生は6%を占め、22%の学生は卒業後に大学院に進学している¹⁵⁾ [p. 6]。教員には、カレッジ雇用の教員（約90名）と外部資金雇用の教員（約10名）がいる¹⁵⁾ [p. 9]。教養カレッジであるために、教員には、研究活動よりも教育活動に従事することが期待されている¹⁷⁾。職員の所属先は、学務（約63名）、入試業務（約20名）、財務（約76名）、地域連携（5.5名）、広報（約26名）、学生支援（約53名）、学長室秘書（3名）である。12.8名の図書館員（職員全体の5.2%）は学務に属する²⁵⁾ [p. 7]。

アラム・カレッジの教育課程には、学士課程と大学院課程がある。学士課程には、造形美術、人文科学、自然科学、社会科学、学際領域に分類される40の専攻課程がある。大学院課程には、神学課程がある。教育目標は、学生が、特定の主題分野の中だけで通用する知識や研究方法ではなく、物事を理解する方法(ways of knowing)を習得することにある¹⁸⁾。そのために、読み、書き、話す能力を重点的に育成する教養基礎科目が必修科目にある。

アラム・カレッジが提供する科目(総数575科目)の多くが小規模のクラス編成である。1クラスあたりの平均的な学生数は17.6名である¹⁵⁾[p.13]。5~9名編成は130クラス(全体の22.6%)、10~14名編成は108クラス(18.8%)である。35名以上からなるのは39クラス(6.8%)であるために¹⁵⁾[p.13]、小規模のクラスが多数を占めていることがわかる。多くのクラスでは、学生間及び学生と教員間の双方向性のある授業を展開している。また、学生の独立学習(independent study)を重視しているために、小論文(research papers)を課す科目が多い⁷⁾[p.146]。

B. 図書館の組織と運営

図書館はカレッジの情報サービス部(Information Services)に属する(第1図)。2001年には、情報サービス部に属するすべての部局が図書館内にオフィスを構え、図書館長が情報サービス部長に就任した¹⁹⁾。

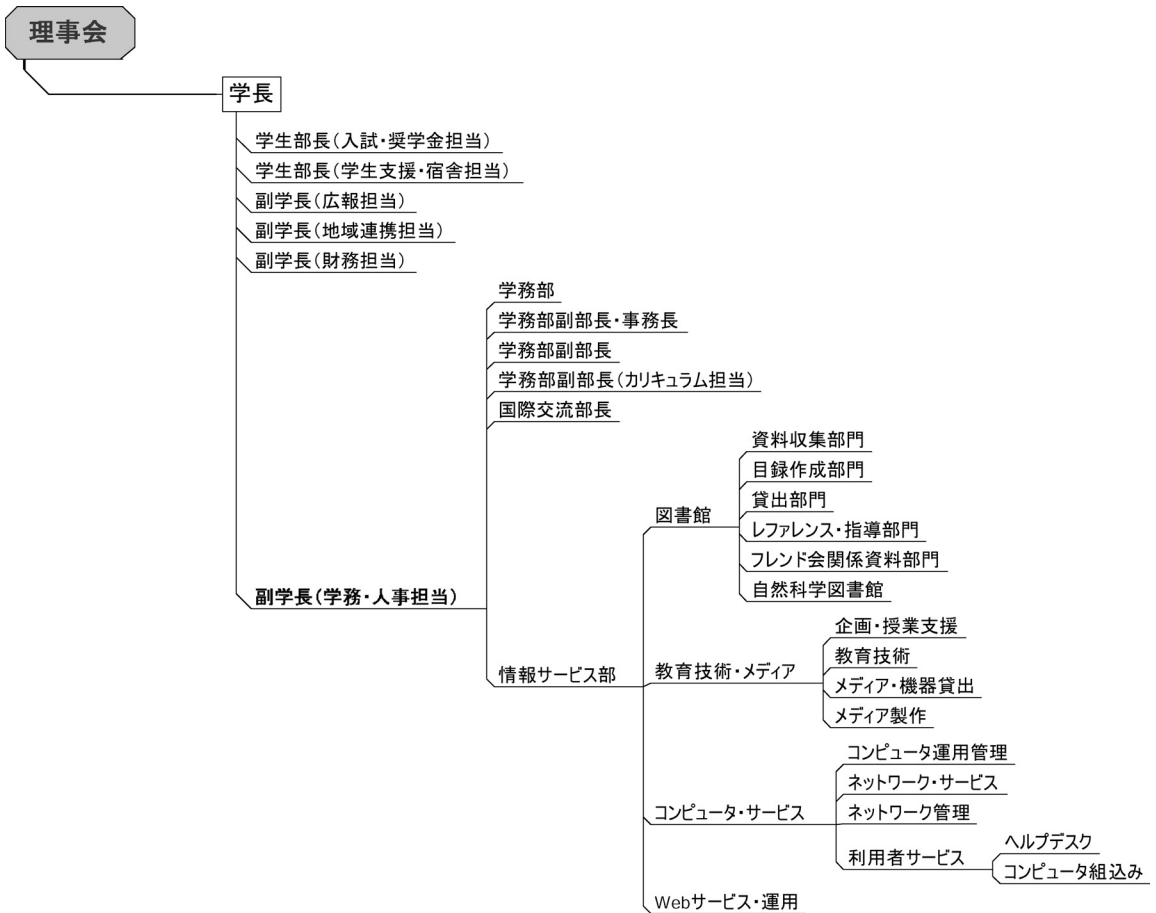
図書館の建物には、中央図書館(Lilly Library)と自然科学棟内にある自然科学図書館(Ernest A. Wildman Science Library)がある。中央図書館は3層からなる。1階には、入退館ゲート、貸出カウンター、レファレンス資料室、雑誌・新聞コーナー、政府資料室、図書館職員の事務室、教職員用のラウンジがある。2階には、図書用書架と閲覧室がある。1階と2階には、大小のグループ演習室、各レファレンス係員の個室がある。地階には、製本雑誌、視聴覚資料室とコンピュータ室、フレンド会関係の資料室がある。

図書館の組織には、資料収集部門、目録作成部門、貸出部門、レファレンス・指導部門、フレンド会関係資料部門、自然科学図書館がある(第1図)。

図書館の職員には、図書館長と12.8名の図書館職員(レファレンス係員を含む正職員8名、非常勤職員4.8名)がいる。図書館長と6名のレファレンス係員²⁰⁾、2名のアーキビストは、教員(teaching faculty)とは異なるが、カレッジの運営に一定の責任を持ち、学術業務に広範囲に責任を持つ専門職員(administrative faculty)の職位を持つ²¹⁾。教員と専門職員の違いは、専門職員が教授や准教授等の職位を持たないことと終身在職権(tenure)を獲得する必要がないことにある²²⁾。レファレンス係員と同じ職位にあるのは、学生支援、入試、教育開発、財務、カレッジの経営、コンピュータ関係の業務を担当する専門職員である。図書館長とレファレンス係員はカレッジの主要な委員会の委員としてカレッジ全体の意思決定に参画している²³⁾。学内講師として授業を担当するレファレンス係員もいる²⁴⁾。

C. 図書館が実施する学習・教育支援の組織と運営

学習・教育支援を担当するのは図書館長とレファレンス係員である²⁵⁾。実施の体制は、個人、チーム、図書館以外の職員との協働などプログラムによって異なる。学習・教育支援を担当するレファレンス係員には、プログラムの企画・実施、ソフトウェアや効果的なプレゼンテーションに関する知識やスキルの習得が必要になると考えられる。だが、図書館内には、資質開発のための組織的なプログラムはない。情報技術担当のレファレンス係員が他のレファレンス係員を対象にWebページの作成法に関する研修会を実施したり、外部資金を得たレファレンス係員が学外のセミナーに参加したりすることはあるが、通常は、個人の努力に任されている。多くの場合に、レファレンス係員は、関連文献や操作マニュアルの閲読、ミーティングや他のレファレンス係員との日常的な交流、学内のコンピュータ担当者への質問を通



第1図 アーラム・カレッジの組織図

して、資質開発に努めている²⁶⁾。

学習支援のための特別な予算枠はない。学習支援に必要なのは配布用紙と印刷費用であるために、図書館全体の運営費を使用している。教育支援については、前任の図書館長が退職時に設立した基金 (Farber Faculty Development Fund)²⁷⁾ を用いるプログラムもあるが、通常は図書館全体の運営費を用いている。

学習支援の実施場所は中央図書館のレファレンス室内にあるコンピュータ演習コーナーである²⁸⁾。1994年に、図書館が、OAシステムを整備する外部資金を得たため、この資金に通常の運営費を追加して演習コーナーを設置した²⁸⁾。1994年の改築前(1962年から1992年)には、地階に

ある視聴覚室を使用していたが、改築後には、レファレンス室内にあるこのコーナーを使用するようになった²⁹⁾。変更の理由は、前任の図書館長が、実際に学習する空間で支援を受けた方が学生の理解が深まる、説明に必要な資料が近くにあると便利であると指摘したことにある²⁹⁾。教育支援を実施する際にも、コンピュータ演習コーナーを使用することがある。

III. 図書館が実施する学習支援

A. 学習支援の概要

アーラム図書館が実施する学習支援の目標には、短期目標と長期目標がある。短期目標は、学生がよりよく学習し、自立した学習者になること

である。長期目標は、学生が卒業後に情報化社会でよりよく生きられることである¹¹⁾[p. 62]。

学生が4年間の学生生活を通して学習支援を受けられるように、アラム図書館では、多様なプログラムを提供している。図書館内に学習支援の体制が整ったのは、前任の図書館長が着任した1962年以降である。1960年代に、図書館利用の小テスト(Library Use Quiz)、学科関連の情報利用指導(course-related bibliographic instruction, 以下、学科関連指導という)³⁰⁾を開始した。

1970年代から1990年代に実施した学習支援プログラムは、図書館利用の小テスト、「人文科学」における情報探索演習、各分野の入門科目及び専門科目における学科関連指導である。この枠組みが長く続いたが、情報通信技術の進展やカリキュラムの改定(2003年)を背景として、学習支援プログラムを大幅に見直した。まず、図書館利用に関する小テストを廃止し、キャンパス情報システムの使用説明会を始めた。また、カリキュラムの改定に伴い、「人文科学」における情報探索演習に代わって、新設の教養基礎科目において学科関連指導を始めた。

B. 新入生オリエンテーションにおける学習支援

1. 図書館利用に関する小テスト

図書館利用に関する小テストは新入生の図書館に関する知識を確認することを目的とするテストであった。実施時間は約15分で、新入生オリエンテーション時に実施していた³¹⁾。実施のきっかけは、新入生が語学や数学のクラス分けテストを受けることにヒントを得て、前任の図書館長が図書館のテストを課すことを提案したことにある。この小テストは1968年に始まり2000年まで続いた。

小テストの目的は、図書館の利用法について十分な知識を持たない学生を特定すること、図書館が語学や数学と同様に重要であると学生に印象づけることにあった。小テストの点数が低い学生には、補講を課していた³²⁾。補講では、図書館長が、練習問題を与え、学生の回答をもとに図書館の利用法について説明した³³⁾。通常は、図書館長が小

テストの実施と補講を担当した。

1990年代半ばまでは、カード目録とReader's Guide to Periodical Literatureから著者名や書名等の書誌情報を読み取る問題が中心であった。1990年代後半には、コンピュータ目録から書誌情報を読み取る問題が中心となった。だが、コンピュータ目録のインターフェースは高等学校によって異なることから、補講を受ける学生が飛躍的に増加するようになった³⁴⁾。そのために、小テストが図書館の知識を持たない学生を特定する手段にはならなくなったと判断して、2000年を最後に小テストを廃止した。

2. キャンパス情報システムの使用説明会

新入生のオリエンテーション時に実施するキャンパス情報システムの使用説明会は2001年に始まった。実施の背景には、図書館利用に関する小テストの廃止後、オリエンテーション全体を企画する事務局が情報システムの使用説明会の実施を図書館に提案したことがある³⁵⁾。

説明会の目的は、学内のネットワーク、キャンパス内で利用できる情報システム、情報サービス部が提供するサービスの利用法について、新入生に基本的な知識や利用法を伝えることにある。1回あたりの対象人数は約20名である。情報技術担当のレファレンス係員³⁶⁾1名と情報サービス関連の部局の職員1名が協働して説明会を実施する。説明内容は、学内のネットワーク、学習管

第1表 キャンパス情報システムの使用説明会の概要

レファレンス係員の自己紹介 概要説明	1分
学内のコンピュータ室、利用可能なソフトウェア及び機器の説明	3分
学内のネットワーク環境の説明	3分
ネットワークへのログイン説明	3分
学習管理システムの説明と演習	10分
電子メール機能の説明と演習	10分
図書館OPACの説明	10分

理システム、電子メールに加えて、OPACの仕組みや利用法である³⁷⁾(第1表)。

C. 学科関連の情報利用指導

学科関連指導は、各科目に必要な文献や情報の探索法についてレファレンス係員が授業時間中に学生に説明する形式の指導である。各分野の入門科目や専門科目において広く実施している。2004年の秋学期には83クラス(受講した学生の延数1,582名)、2005年の春学期には54クラス(受講した学生の延数1,058名)に実施している³⁸⁾。

学科関連指導の始まりは、前任の図書館長が数日間に多くの学生から同じレファレンス質問を受けたことにあった³⁹⁾。図書館長は、他のレファレンス係員も同じ質問を受けていること、同じ回答を必要とする学生が他にもいることを推察して、「この質問事項に関する情報の探索法について、授業の中で説明する機会を得られないか。」とそのクラスの担当教員にたずねた⁷⁾[p. 148]。この教員が快諾したこと、教員と学生の双方がレファレンス係員(この場合は図書館長)による説明を高く評価したことから、他のクラスでも同様の支援を実施するようになった。

学科関連指導を担当するのはレファレンス係員と図書館長である。1名のレファレンス係員(情報技術担当以外)が1学期に担当するのは約20クラスである⁴⁰⁾。情報技術担当のレファレンス係員及び図書館長は1学期あたりそれぞれ約10クラスを担当する⁴¹⁾。

学科関連指導の手順はクラスごとに異なるが、一般に次の手順で実施している⁴²⁾。

- ①レファレンス係員(ここでは、図書館長を含む)は、学期が始まる2~3週間前に、Web上で公開されている講義要綱にアクセスして、自分が担当する主題分野の科目から小論文を課す科目の情報を抽出する⁴³⁾。
- ②レファレンス係員が、①の科目の担当教員に、レファレンス係員による支援が必要かどうかを電子メールによって確認する。支援が必要になる場合には、教員がこのレファレン

ス係員にシラバス(原案)を送付する。

- ③レファレンス係員は、送付されたシラバスを読み、必要に応じて教員と連絡をとりながら、小論文のテーマについて理解を深める。そして、教員との相談の上、学科関連指導の実施日を決定する。
- ④レファレンス係員は、小論文のテーマに関する冊子体の一次資料や二次資料、データベースを検討してパスファインダーを作成する。教員は学科関連指導の日時等の情報をシラバスに加える。
- ⑤レファレンス係員は、パスファインダーにデータベースへのリンクを組み入れ、これをWeb上で公開する⁴⁴⁾。
- ⑥学科関連指導の実施日には、レファレンス係員が、パスファインダーを示しながら、冊子体の一次資料や二次資料、データベースを用いた情報の探索法、情報の入手法について説明する。

学科関連指導に加えて、近年では、教員や学生の依頼に応じて、学科関連のソフトウェアの操作法指導も実施している。この担当は情報技術担当のレファレンス係員である⁴⁵⁾。通常は、1学期あたり4~5クラスから依頼を受ける。これまでに、PowerPointの操作法、Excelを使ったデータの分析法、Webページの作成法について指導をしている⁴⁶⁾。

D. 基礎科目における学習支援

1. 「人文科学」における情報探索演習

「人文科学(Humanities) A, B, C」は、歴史学、宗教学、哲学等の専攻教員によるオムニバス形式の教養必修科目であった⁴⁷⁾。「人文科学A」の1回分が図書館関係者の担当である。科目目標は、学生が、どの主題分野にも役立つ知識と順応性のある学習スキル、自分で学習する力と他の学生と協力して学習する力を習得することであった⁴⁷⁾。したがって、毎週のように文献講読と小論文の作成が課題としてあり、著者の主張を理解するために、読み、書き、批判的に討論する機会が多くあった⁴⁷⁾[p. 1, 4-5]。1クラスは約17名編成で

あった。通常は、「人文科学 A」と「人文科学 B」の課題として古典を中心とする文献講読と小論文(6題)があり、「人文科学 C」の課題として文献講読と小論文があった⁴⁷⁾[p. 11]⁴⁸⁾。

「人文科学 A」の文献講読のない週に、図書館が作成した『探索の方法とレファレンス情報源(Search Strategies and Reference Sources)』というワークブックを課していた⁴⁹⁾。ワークブックでは、図書館を使った研究プロセスを3つのレベルで紹介している。①事典や一般的な文献を用いて背景的な情報を探索する。②OPACを用いて特定の主題に関する文献を探索する。③雑誌記事索引を用いて特定の主題に関する論文を探索する。ワークブックでは、レベルごとに、検索式や検索の手順を図解し、演習問題を与えている。学生は、OPACやデータベース等を利用して問題を解き、情報探索の手順を理解した。

2003年のカリキュラムの改定時に「人文科学 A, B, C」が廃止されたために、この情報探索演習も廃止することになった。これに代わって、新設の教養基礎科目において学科関連指導を開始した⁵⁰⁾。

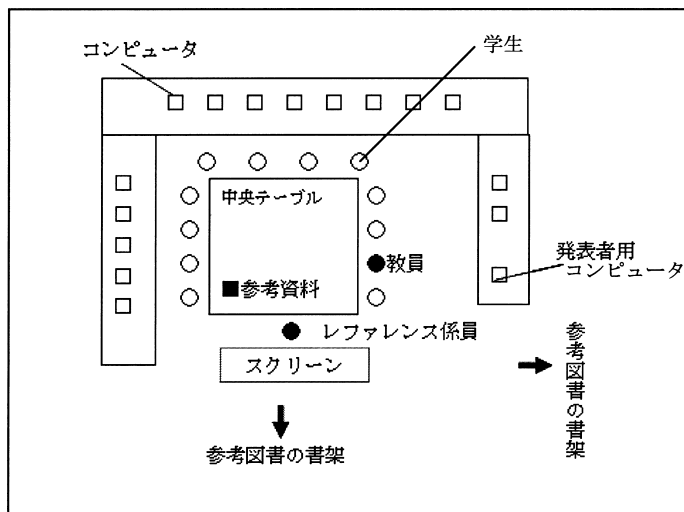
2. 教養基礎科目における学科関連指導

新しいカリキュラムの中では、研究スキルの育成を目標とする「解釈・説明演習」、「アールラム・セミナー」、「比較演習」において学科関連指導を実施している。

「解釈・説明演習(Interpretative Practices)」は初年次の必修科目(4単位)である¹⁸⁾[p. 15]。1クラスは16名編成である。クラスは20あり、各クラスは「万人のための自由と正義」、「アジア系米国人の歴史」など教員の専門分野を反映した主題を持つ。科目目標は、学生が、特定の主題に関する学習を通じて、読み、書き、他の学生と討論するスキルなど学生生活及び将来の生活に役立つ基礎的な学習スキルを習得することである。

「アールラム・セミナー(The Earlham Seminar)」も初年次の必修科目(4単位)である¹⁸⁾[p. 15]。1クラスは16~18名編成である。クラスは24あり、各クラスは「ギリシア・ローマ神話」、「グローバル化」など教員の専門分野を反映した主題を持つ。科目目標は、学生が、関心を持つ主題の研究を通じて、基本的な研究スキルを習得することである。

「比較演習(Comparative Practices)」は2年次以上の必修科目(3~4単位)である¹⁸⁾[p. 15]。1クラスは18~20名編成である。クラスは55あ



第2図 「アールラム・セミナー」における学科関連指導のフロア図：レファレンス室内のコンピュータ演習コーナー

第2表 「アラム・セミナー」における学科関連指導の進行表

13:00	〔場所：レファレンス室内にあるコンピュータ演習コーナー〕 レファレンス係員が、学生（11名）とクラスの担当教員に自己紹介をして、自分の部屋の場所と連絡先を伝える。
13:05	レファレンス係員が、配布した紙媒体のパスファインダー（Web上からも入手可能）を示しながら、冊子体の一次資料と二次資料、データベースの種類と情報の探索法について説明する。 〔質問〕（学生からレファレンス係員）：「1900年に起こった重要な出来事は？」 〔回答〕：（学生が口々に答える。）
13:15	レファレンス係員が、索引の使い方を説明し、アラム図書館のOPACの使い方を説明する。その中で、検索式の作成法、相互貸借の依頼の方法について説明する。 〔質問〕（学生からレファレンス係員）：「相互貸借を申し込む前に、学生自身が資料の所蔵館を確認しておく必要があるのか？」 〔回答〕：「学生が確認する必要はない。」
13:20	（全員が参考図書の書架へ移動する。）レファレンス係員が、参考図書の書架配列と請求記号について説明する。
13:23	（演習コーナーへ戻る。）レファレンス係員が、アラム図書館で利用可能なデータベースの検索法（キーワード検索）を説明し、文献の予約方法を説明する。また、検索結果のページの構成を説明する。 〔質問〕（学生からレファレンス係員）：「学生自身が実際にデータベースを使って検索することができるのか？」 〔回答〕：「学生も検索できる。」
13:30	レファレンス係員が、アラム図書館のOPACをつかって、著者名検索について説明する。この時に、特定の情報（人物情報）について調べるだけでなく、その背景となる一般的な情報（人物に関わる国の情報等）についても検索するように指導をする。
13:35	〔質問〕（学生からレファレンス係員）：「雑誌と学術雑誌の違いは？」 〔回答〕：「雑誌には、雑誌記者が書いた記事を掲載する大衆雑誌（general periodicals; magazines）と、専門家が書いた記事を掲載する学術雑誌（scholarly journals）がある。大衆雑誌の特徴は、高い視覚効果をもち、人目を引く短い題目を付し、短い本文をもつことにある。学術雑誌の特徴は、視覚効果をほとんどもたず、長い題目を付し、長い本文をもつことに加えて、特別な語彙を使用し、通常は脚注や参考文献を含むことにある。」 レファレンス係員が、Literature Resource Centerの検索法、検索結果のデータの読み取り方について説明する。その時に、検索結果をEndNote（文献情報を管理するソフトウェア）に転送できることを説明する。また、関連するデータベースを紹介する。
13:43	レファレンス係員が、MLA International Bibliographyの検索法と相互貸借の方法について説明する。また、紙媒体及び電子媒体の論文の入手法と、アラム図書館内の雑誌架の場所を説明する。
13:50	〔質問〕（レファレンス係員から学生）：「これまでにJSTORを利用したことがある人は？」 〔回答〕：（1名の学生のみが利用経験をもっていた。） レファレンス係員が、JSTORの検索法とフルテキストの利用法について説明する。その中で、検索結果を評価する必要性、MLA International BibliographyとJSTORの違いを説明する。
13:55	〔質問〕（レファレンス係員から教員）「追加の説明事項はないか？」 〔回答〕：「特にない。」 レファレンス係員が、これまでの検索結果をもとに、与えられた小論文の主題を絞り込む方法について説明する。
13:58	教員が、レファレンス係員による説明内容を要約し、小論文を作成するには図書館利用が必要になることを学生に伝える。 教員と学生は教室へ戻る。

り、各クラスは「実存主義」、「宗教と心理学」など教員の専門分野を反映した主題を持つ。「比較演習」は「解釈・説明演習」の統編的な科目である。科目目標は、学生が、特定の主題分野の学習を通じて、「解釈・説明演習」において習得した学習スキルを発展させることにある。科目の主な活動には、学生が、より複雑な課題に取り組みながら、多様なテキスト (texts)¹⁸⁾ [p. 15]⁵¹⁾ を比較することがある。

教養基礎科目において学科関連指導を始めた理由は、新カリキュラムの科目のうち、研究スキルの育成を目標とする教養基礎科目が図書館利用と最も関係が深いと図書館関係者が考えたことにある。実施の手順は学科関連指導 (本稿 III. C.) と同様である。

第2図及び第2表は「アラム・セミナー」で実施した学科関連指導の一例である⁵²⁾。科目の主題は「退廃的なアイデンティティ：1900年頃のウィーン」で、ドイツ語・ドイツ文学専攻教員が担当する。この科目は毎週2回、1学期 (14週間) に合計32回の授業時間を持つ。科目目標が作文力の強化であることから⁵³⁾、課題として4題の小論文がある。学科関連指導の実施日は8回目の授業時間であった。教員とレファレンス係員は、学科関連指導の実施日を学生がひとつ目の小論文の主題を決定した次の授業時間に設定した。実施日を決定した理由は、学生が探索の対象となる情報について具体的なイメージを持った直後が最も教育効果が高まるという考えによる⁵⁴⁾。

IV. 図書館が実施する教育支援

A. 教育支援の概要

アラム図書館が実施する教育支援の目標は、図書館の学習・教育支援機能について教員が理解すること、教育活動を質的に向上させるために教員が情報活用スキルを向上させることにある⁵⁵⁾。

教育支援には、新任及び現職の教員を対象とする多様なプログラムがある。教育支援の体制が整ったのは1970年代である。1970年代に、新規採用教員の候補者との面談、新任教員への図書館サービス案内状、新任教員への図書館ガイダンス

を開始した。近年では、情報通信技術の進展を背景として、データベースの検索法に関するワークショップ⁵⁶⁾ や教育用ソフトウェアの操作法に関するワークショップを実施している。カリキュラムの改定後には、教養基礎科目の担当教員を対象として教育改善ワークショップも実施している。

B. 新規採用教員の候補者との面談

新規採用教員の候補者との面談では、図書館長が、教員の候補者に図書館の機能やサービスについて説明し、図書館を案内する。教員の候補者が就職面接のためにキャンパスを訪問するときに、面接の一環として実施している。面談の目的は、

第3表 新任採用教員の候補者のキャンパス訪問のスケジュール

時間	2月5日(木)	2月6日(金)
7:30	哲学科長との朝食	宗教学・哲学専攻教員との朝食
8:30		
9:00	学部長との面談	図書館長との面談
10:00	教員人事委員会の委員(5名)との面談	哲学科の会議への参加
11:00	政治学科教員との面談	学生教員問題委員会(SFAC)の委員の学生(3~5名)との面談
11:30		
12:00	英語学科教員との昼食	終了
13:00		
13:15	学長との面談	
14:00	総務兼アフリカ・アフリカ系アメリカ研究専攻教員との面談	
14:30	アフリカ・アフリカ系アメリカ史研究専攻教員との面談	
15:00	休憩	
16:15	模擬授業	
17:15	休憩	
17:30		
18:15	夕食	

アラム図書館が教育面で重要な役割を果たしていることを教員の候補者に印象づけること、教員と図書館関係者が対面する機会を設けることにある⁵⁷⁾。

教員の候補者との面談が始まったきっかけは、前任の図書館長がカレッジの一部局である図書館も教員の候補者の面接に加わってはどうかと提案したことにある⁵⁸⁾。

第3表は哲学及びアフリカ・アフリカ系アメリカ研究を専攻する教員の候補者のキャンパス訪問のスケジュールである⁵⁹⁾。教員の候補者と図書館長の面談の手順は次のとおりである⁶⁰⁾。

①教員の候補者を持つ学科の秘書が図書館長に、教員の候補者がキャンパスを訪問する日時を伝える。

②図書館長は、教員の候補者がカレッジに送付

第4表 教育改善ワークショップの概要

9:00	(全員が図書館内にある教職員用ラウンジに集合する。)自己紹介を兼ねて、参加者(9名)とワークショップを担当するレファレンス係員(2名)が歓談する。
9:30	(レファレンス室内にあるコンピュータ演習コーナーに移動する。) テーマ:「新しい情報資源と新しい課題」 <ul style="list-style-type: none"> ・全員が中央テーブルの周囲に着席した後、レファレンス係員が、本日のワークショップの目的が教員とレファレンス係員の意見交換にあることを伝える。 ・レファレンス係員が、教員が日常的にもつ課題に関する問題についてたずねる。 ・教員が課題に関する日常的問題を伝える。例として、学生が、適切なデータベースを選択できないこと、小論文に引用を正しく表記しないことがある。 ・レファレンス係員は、データベースの適切な選択方法、教員が学生に引用や剽窃について説明する必要性など、具体的な解決方法について説明する。 ・教員が日常的にもつ課題に関する問題について、全員が討議する。
10:30	テーマ:「研究プロセスの指導」 <ul style="list-style-type: none"> ・レファレンス係員が、これまでに学生から受けたレファレンス質問等をもとに、学生が日常的にもつ情報探索の問題を教員に伝える。例として、学生が設定する小論文のテーマの範囲が広いこと、学生が専門用語やその関連語を知らないこと、レファレンス係員が読んだ学生の小論文がよくなかったことがある。 ・レファレンス係員が教員に、学生に研究の手法や研究のプロセス、小論文の書き方について指導することの重要性を伝える。 ・レファレンス係員が、教員が学生に説明する必要がある事項として、主題によって探索する情報資源が異なること、研究プロセスには批判的思考が必要になること、があると説明する。次に、これらの事項を学生に説明する方法について、全員が討議する。 ・図書館が実施する学科関連指導を授業へ組み入れる方法について、全員が討議する。
12:00	(図書館内にある教職員用ラウンジへ移動する。) 全員が、用意された昼食をとりながら、授業や学生の問題について意見を交換する。
13:00	(レファレンス室内にあるコンピュータ演習コーナーに移動する。) テーマ:「社会科学分野の情報探索法」 <ul style="list-style-type: none"> ・各教員が日常的にもつ課題に関する問題を発表した後、全員が解決方法について討議する。 ・レファレンス係員が、教員はいつでもレファレンス係員の援助を受けられることを伝える。
14:00	テーマ:「剽窃」 <ul style="list-style-type: none"> ・レファレンス係員が、これまでに受けたレファレンス質問の経験をもとに、学生が剽窃の知識を持たないこと、教員が学生に剽窃についての理解を促す必要があることを伝える。 ・全員が剽窃の問題とその解決方法について討議する。 ・レファレンス係員が、課題を設定する時の留意点を教員に伝える。具体的には、小論文のテーマを毎年同じテーマに設定しないことがある。
15:00	終了

した履歴書を学科の秘書から取り寄せる。

③図書館長は、面談までに教員の候補者の履歴書を読み、教員の候補者の専門分野や研究・教育業績、出身大学等の情報を得る。

④面談当日には、図書館長は、約1時間をかけて、教員の候補者が学生に研究課題を与えた経験、自らの研究における図書館利用の経験について質問する。また、アラム図書館が提供するサービス、図書館関係者と教員間に緊密な協力関係があることを説明する。

面談の場所は図書館長室である。面談では、教員の候補者の多くが研究大学の出身であることから、図書館長は、大規模な研究大学の図書館と小規模な教養カレッジの図書館との違い、アラム図書館が実施している学習支援プログラムとその特徴を説明する。その際に、学科関連指導が重要であること、教員が希望すれば図書館の支援をいつでも受けられることを伝えている⁶¹⁾。

C. 新任教員への図書館サービスの案内状

新任教員への図書館サービスの案内状は、図書館長がカレッジに着任した教員に送付する図書館サービスについて説明した手紙である。案内状には、授業で必要となる文献については図書館が購入できること、レファレンス係員がいつでも相談を受けることを記している⁶²⁾。

案内状を送付する目的は、新任教員に図書館とレファレンスサービスの存在を印象づけることにある⁶³⁾。案内状の送付が始まったのは、「新任教員が着任時にカレッジ関係者から何らかの歓迎を受けたら嬉しいのではないか。」と前任の図書館長が提案したことにある⁶⁴⁾。1970年代からこれまでに、すべての新任教員に案内状を送付している。

D. 新任教員への図書館ガイダンス

アラム・カレッジでは、毎年、新任教員を対象とする1日間のオリエンテーションを実施する。通常、参加対象となるのは数名である。オリエンテーションでは、インディアナ州やリッチモンドの歴史や文化、カレッジの歴史や理念の説明

がある。オリエンテーションの一環として、図書館関係者が図書館ガイダンスを実施している⁶⁵⁾。図書館ガイダンスでは、主に図書館長が、約1時間にわたり、図書館が提供するサービスについて新任教員に個別に説明し、図書館を案内する。2004年度には、10名の新任教員がいたことから、全体のオリエンテーションとは別に半日間の図書館ワークショップを実施した⁶⁶⁾。

図書館ガイダンスの目的は、新任教員が図書館のサービスや学習・教育支援機能についてどの程度理解しているのかを把握することに加えて、アラム図書館がカレッジの教育活動に積極的に関わっていることを新任教員に印象づけること、学科関連指導などの学習支援の理念を伝えることにある⁶⁷⁾。

E. 教育改善ワークショップ

教育改善ワークショップは教員とレファレンス係員が教養基礎科目における課題や指導法について検討する研修会である。ワークショップの目的は、教員が情報資源や課題について理解を深めること、教員とレファレンス係員、教員同士が情報交換する機会を設けることにある⁶⁸⁾。ワークショップを開始したのはカリキュラムが改定された2003年である。

2003年の夏期休暇中に実施したのは「新カリキュラムにおいて使用する情報資源」と題する1日間のワークショップであった。教員のスケジュールを考慮して、夏期休暇中に同じ内容のワークショップを3回実施した。ワークショップの担当は2名のレファレンス係員である。1回あたりの参加者は6~10名であった。参加者は、ブレーン・ストーミングや討論によって、新しい情報資源と新しい課題、研究プロセスの指導法、剽窃の問題について理解を深めた。剽窃をテーマとした理由は、多くの教員から剽窃関係のレファレンス質問を受けること、学生が剽窃について理解していないこと、図書館情報学分野の主要な課題であることにある⁶⁹⁾。ワークショップの費用には、ファーバーFD基金²⁷⁾を用いた。参加者一人あたりの費用は、1日分の俸給と交通費、テキスト

ト代、昼食費を含む約 100 ドルであった⁷⁰⁾。

第 4 表は 2004 年に実施したワークショップの概要である⁷¹⁾。

V. 図書館が実施する学習・教育支援の評価

A. 学習支援の評価

1. 学生による学習支援の評価

アラム図書館が 1997 から 1998 年にかけて実施した質問紙調査⁷²⁾ 及び 1999 年に実施したフォーカス・グループ・インタビュー (FGI)⁷³⁾ において、学生が学科関連指導を評価している。

質問紙調査では、図書館利用に関する指導について、学生にとっての重要性と図書館のパフォーマンスをたずねている。この結果、学生は、学科関連指導の重要性を認識し、かつ、図書館が利用者の期待に応えていると評価していることが明らかになっている。具体的には、「研究を進めやすくする学科関連指導」という質問項目について 5 段階で評価した結果、学生にとっての重要性を 4.20、図書館のパフォーマンスを 4.17 と評価している⁷²⁾。また、「情報資源の理解や利用に役立つ学科関連指導」については、印刷資料に関する学科関連指導の学生にとっての重要性を 4.38、図書館のパフォーマンスを 4.13 と評価し、オンライン情報に関する学科関連指導の学生にとっての重要性を 4.38、図書館のパフォーマンスを 4.16 と評価している⁷²⁾。

FGI では、学生は、学科関連指導を通して情報探索の意義と方法を学習することの有用性、特に、特定の主題に関する情報探索についての有用性を肯定的に評価している。具体的には、「学科関連指導を繰り返し受けることにより (中略) 総合目録やデータベースを利用することが苦痛ではなくなった。(中略) レファレンス係員が課題達成のためにすべきことを説明してくれたことは、とてもためになった。」⁷⁴⁾、「学科関連指導を何度も受けたことにより (中略) データベースの検索に自信が持てるようになった。」⁷⁵⁾ という評価がある。また、「科目の主題に即した情報探索の指導は、大変役に立ち、頼りになる。」⁷⁶⁾ という評価も

ある。その一方で、説明の繰り返しによる時間の浪費、一般的な情報探索の有効性への疑問など否定的な評価がある。具体的には、「学科関連指導はプロジェクト課題をもつすべての科目で実施されるので、同じ内容の指導を繰り返し受けた。説明の繰り返しは授業時間の浪費である。」⁷⁷⁾、「情報探索法を理解していない学生だけに学科関連指導を受けさせた方がよい。」⁷⁸⁾、「学生は 2 回目以降になると学科関連指導に参加しなくなる。(中略) 一般的なデータベースの説明を何度も聞く必要はない。」⁷⁹⁾ という評価がある。学科関連指導は各科目の個性に対応しているために、科目毎に説明内容が異なる。だが、部分的ではあっても、重複した説明があることにより、学生に同じ説明を繰り返し受けたという印象を与えていることが考えられる。

2. 教員による学習支援の評価

アラム図書館が 1997 から 1998 年にかけて実施した質問紙調査⁸⁰⁾、教員が執筆した各種の報告書等⁸¹⁾ において、教員は学科関連指導を評価している。

質問紙調査では、図書館利用に関する指導について、教員にとっての重要性と図書館のパフォーマンスをたずねている。この結果、教員が、学生以上に学科関連指導の重要性を認識し、かつ、図書館が利用者の期待に応えていると肯定的に評価していることが明らかになっている。具体的には、「学生の研究を進めやすくする学科関連指導」という質問項目について 5 段階で評価した結果、教員にとっての重要性を 4.81、図書館のパフォーマンスを 4.56 と評価している⁸⁰⁾。また、「課題のテーマに焦点をあてた学科関連指導」については、教員にとっての重要性を 4.73、図書館のパフォーマンスを 4.55 と評価している⁸⁰⁾。

報告書等では、学生の情報の利用法が変化したこと、提出される課題の質が向上したことから、教員は学科関連指導を肯定的に評価している。具体的には、「学科関連指導を受けた学生は、情報を探索するだけでなく、情報を評価するようになった。」⁸¹⁾ [p. 45]、「多くの場合、学生は学科関連指

導を受けて習得した情報探索スキルを他の主題を探索する際にも応用している。」⁸²⁾、「学科関連指導を受けた学生は課題の達成に必要な方法を理解している。その結果、質のよい課題が提出されるようになり、成績評価の作業が楽になった。」⁸³⁾という評価がある。このように、学科関連指導が教員の教育活動にも影響を与えたという評価もみられる。具体的には、「多分野にわたる文献を引用した学生の小論文を読むことにより、教員は自分の専門以外の分野についても適切に主題を選択できるようになる。」⁸²⁾ [p. 30]、「教員自身が自分の専門分野の新しい情報を入手し続けるには多大な時間が必要になる。学科関連指導を通じて、自分の専門分野の最新動向を知ることができる。」⁸³⁾ [p. 52]という評価がある。多くの肯定的な評価がある一方で、学生と同様に、複数の科目における説明の繰り返しについては改善の余地があるとしている。具体的には、「学科関連指導を何度も受けると同じ説明を繰り返し聞くことになる。4年間の学生生活を視野に入れて体系的な学習支援を計画する必要がある。」⁸⁴⁾という指摘がある。

B. 教育支援の評価

教育支援について、教員は肯定的な評価をしている。教員が最も評価しているのは、新規採用教員の候補者との面談や新任教員への図書館サービスの案内状によって、教育活動に果たす図書館やレファレンス係員の役割を理解したことである。具体的には、「就職面接の一環として、図書館長と面談したことに驚いた。この面談を通して、アラム図書館が着任後の教育活動を支援してくれることがよくわかった。」⁸⁵⁾、「図書館長との面談を通じて、アラム・カレッジでは図書館が重要な役割を果たしていること、レファレンス係員が我々の教育活動を支援しようとしていることがよくわかった。」⁸⁶⁾、「着任直後に受け取った図書館サービスの案内状によって、アラム図書館の協力的な雰囲気伝わってきた。」⁸⁷⁾など着任時の印象づけを高く評価している。着任時に図書館の学習・教育支援機能を知ったことによって、担当科目における学科関連指導を依頼した教員もい

る⁸⁸⁾。また、「教育改善ワークショップでは、説明内容が役立つだけでなく、異なる専門分野の教員とクラス内の問題について討論したことが教育活動を見直す上で役に立った。」⁸⁹⁾、「教育支援は自分の専門分野の新しい情報を得るのに有用だと思う。」⁹⁰⁾という評価がある。

VI. おわりに

本稿では、アラム図書館が実施する学習・教育支援について、なぜ実施するようになったのか、どのように実施しているのか、どのように評価されているのかという観点から明らかにした。

概括すると、学習・教育支援を始めた主な理由には、学生や教員の顕在するニーズや潜在的なニーズへの対応、カレッジが提供する学習・教育支援プログラムへの結びつけという特徴が見られる。ニーズに対応した学習支援プログラムには、学科関連指導があり、その教育支援プログラムには、教育改善ワークショップがある。カレッジのプログラムと結びつけた学習支援プログラムには、図書館利用小テスト、キャンパス情報システムの使用説明会があり、その教育支援プログラムには、新規採用教員の候補者との面談、新任教員への図書館ガイダンスがある。

学習・教育支援の主な実施方法には、印象づけの繰り返し、小論文を課した授業の支援という特徴が見られる。印象づけを主な目的とする学習支援プログラムには、図書館利用に関する小テスト、キャンパス情報システムの使用説明会があり、その教育支援プログラムには、新規採用教員の候補者との面談、新任教員への図書館サービス案内状、新任教員への図書館ガイダンスがある。ここから、アラム図書館が教員への印象づけを繰り返し行なっていることがわかる。小論文を課した授業を支援する学習支援プログラムには、学科関連指導があり、その教育支援プログラムには、教育改善ワークショップがある。

学習支援の評価について、一部の支援に関する評価であるが、学生は学習支援を課題の達成に有用だと考えていることが明らかになっている。特に、特定の主題に関する情報探索の支援を高く評

価している。その一方で、同じ説明の繰り返し、一般的な情報探索の支援の有用性を疑問視する学生もいる。教員は、学習支援を受けた学生の情報活用スキルが向上していること、その結果、提出された課題の質が向上していることを高く評価している。一方、学生と同様に、同じ説明が繰り返されている現状を見直す必要があると指摘している。教育支援について教員が最も評価しているのは、教育活動に果たす図書館やレファレンス係員の役割を教員が知る機会を持ったことである。この機会が教員のその後の図書館利用に影響を与えている。

「はじめに」で述べたように、本稿の特徴は、全面的に記述的で、理論構築を目的としない記述的ケース・スタディの手法を用いて、アラム・カレッジが実施する学習・教育支援の全体像を説明することにある。これは、本稿の記述が仮説の構築を目的としていないことを意味する⁹¹⁾。したがって、仮説の証明も理論の構築も目指していないことに本稿の限界がある。今後の課題は、この記述的ケース・スタディをもとに、理論的研究を進めることにある。具体的には、大学の教育活動における教員と図書館員の連携に関する概念的枠組みを考案することである。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々から支援を頂戴しました。ウエイン州立大学(Wayne State University) 図書館情報学プログラムの Ronald Powell 先生は、研究計画について指導し、アラム・カレッジに紹介状を送って下さいました。アラム・カレッジの Neal Baker, Amy Bryant, Evan Ira Farber, Jeremy Garritano, Bob Johnstone, Thomas G. Kirk Jr., Christine Larson, Beth McMahon, Kathy Milar, Sara Penhale, Bob Southard, Nancy Taylor, Janet Wagner は、訪問調査、電子メールによる質問への回答及び本稿の内容確認にご協力下さいました。アラム図書館の Michele Riggs, Thomas Hamm, ウエイン州立大学の Purgy Library 及び長崎大学附属図書館の関係者は、関連情報の探

索にご協力下さいました。また、査読者の方は多くの貴重な示唆を下さいました。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科の葉袋秀樹先生は研究計画から本稿執筆に至るまで丹念にご指導下さいました。ご指導・ご協力下さった方々に、心よりお礼を申し上げます。

本研究は2004年度及び2005年度の科学研究費(若手研究B)「ファカルティ・ディベロップメントの視点を取り入れた大学図書館の教育支援機能研究: 米国のケース・スタディを中心に」の助成を受けています。

注・引用文献

- 1) 通常、学習・教育支援に関する活動には、学習・教育用コレクションの構築から図書館利用教育にいたるサービスが広く含まれる。本稿では、学習支援は「学生を対象とする図書館を使った情報リテラシー教育」を、教育支援は「教員を対象とする「学生を対象とする図書館を使った情報リテラシー教育」に相当する支援」を意味している。
- 2) 例として、Branscomb, H. *Teaching with Books: A Study of College Libraries*. Chicago, American Library Association and Association of American Colleges, 1940, 239 p.
- 3) 例として、Knapp, P. B. *The Monteith College Library Experience*. New York, Scarecrow Press, 1966, 293 p.
- 4) アラム・カレッジにおいて学習支援(学科関連指導)を受けたクラスの教員、図書館長及びレファレンス係員が、他大学の教員や図書館員に、自らの経験をワークショップを通して伝えている。
- 5) 例として、LOEX (Library Orientation Exchange)の年次大会がある。LOEXは1971年に設立された図書館利用教育及び情報リテラシー教育関連の非営利団体である。
- 6) この功績が称えられて、アラム図書館はThe 2001 Excellence in Academic Libraries Awardを獲得している。また、現職の図書館長はThe 2004 ACRL Academic/Research Librarians of the Yearの賞を獲得している。〔Bielefeld, M. ACRL honors the 2004 award winners. *College and Research Libraries News*. vol. 65, no. 3, 2004, p. 141〕
- 7) 例として、Farber, E. I. "Library instruction throughout the curriculum: Earlham College program". *Educating the Library User*. New York, R.R. Bowker, 1974, p. 145-162.
- 8) Wilkinson, B. R. *Reference Services for Undergraduate Students: Four Case Studies*.

アールラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ

- Metuchen, Scarecrow Press, 1972, 421 p.
- 9) Eyman, D. H. The Use of Periodical Collections in Selected Liberal Arts College Libraries by College Seniors Majoring in History. Ann Arbor, University of Michigan, 1975, 229 p. Ph.D.thesis. available from University Microform International, Order no. 7520337.
 - 10) Hardesty, L. L. The Development of a Set of Scales to Measure the Attitudes of Classroom Instructors Toward the Undergraduate Educational Role of the Academic Library. Bloomington, Indiana University, 1982, 370p. Ph.D.thesis. available from University Microform International, Order no. 8308857.
 - 11) Taylor, S. K. An Examination of Course-Related Library Instruction Programs at Three Small Private Liberal Arts Colleges. Manhattan, Kansas State University, 1991, 194p. Ph.D. thesis. available from University Microform International, Order no. 9218634.
 - 12) Merriam, S. B. 質的調査法入門：教育における調査法とケース・スタディ。堀薫夫ほか訳。京都、ミネルヴァ書房，2004，p. 55-56.
 - 13) 聞き取りの対象は、前任の図書館長、現職の図書館長、レファレンス係員（6名）、自然科学図書館の図書館員（2名）、教員（3名）である：Neal Baker (Information Technology/Reference-Instruction Librarian), Amy Bryant (Information Technology/Reference-Instruction Librarian), Evan Ira Farber (前任の図書館長), Jeremy Garritano (自然科学図書館員, 2004～2005年度), Bob Johnstone (政策科学専攻教員), Thomas G.Kirk Jr. (現職の図書館長), Christine Larson (Reference-Instruction Librarian), Beth McMahon (Reference-Instruction Librarian), Kathy Milar (心理学専攻教員), Sara Penhale (自然科学図書館員), Bob Southard (歴史学専攻教員), Nancy Taylor (Head Reference-Instruction Librarian), Janet Wagner (Technical Services Librarian).
 - 14) America's best colleges 2007 (Liberal arts colleges: top schools). <http://www.usnews.com/usnews/edu/college/rankings/brief/t1libartco_brief.php> [最終確認日：2007-04-09]
 - 15) The Earlham College Fact Book 2003. Richmond, Earlham College, 2003, p. 7-8.
 - 16) 学生の出身地は次の通りである。インディアナ州（24%）、他の中西部（28%）、東海岸（23%）、南部（9%）、西部（10%）、米国外（6%）。〔前掲 15), p. 1.〕
 - 17) カレッジが教員に教育への貢献を強く期待していることは、教員の募集要項の主要事項に教育義務が記載されていることから明らかである。
- 〔内部資料：教員の募集要項。2005.〕
- 18) Curriculum Guide 2003-2005. Richmond, Earlham College, 2003, p. 14.
 - 19) 電子メール：現職の図書館長（2006-07-18）
 - 20) 本稿では、レファレンス係員はアールラム・カレッジにおいてレファレンス指導員（reference-instruction librarian）と称される図書館員を意味する。2名の情報技術担当のレファレンス係員（technology/reference-instruction librarian）についても、特定する必要のない場合には、レファレンス係員に含めている。また、便宜上、整理業務の担当者（technical services librarian）もレファレンス係員に含めている。
 - 21) 電子メール：現職の図書館長（2006-07-18）
 - 22) 聞き取り：現職の図書館長（2004-05-19）
 - 23) カレッジの主な委員会として、①ファカルティ任命委員会 (Faculty Nominated Committee), ②予算委員会 (Budget Committee), ③カリキュラム委員会 (Curriculum Committee), ④人事政策委員会 (Faculty Personal Committee) がある。①④の委員になるには各々の委員会の他の委員から選出される必要がある。②③の委員になるには①の委員会から任命される必要がある。通常は、レファレンス係員は4つの委員会のうち複数の委員会の委員に選出・任命される。2003年には、レファレンス係員がすべての委員会に委員として選出・任命された。レファレンス係員がすべての委員会の委員となるのは、過去にほとんど例がない。〔聞き取り：現職の図書館長（2004-03-31）〕
 - 24) 例として、「映画研究 (Film Studies)」, 「日本映画 (Japanese Film)」を担当するレファレンス係員がいる。〔電子メール：現職の図書館長（2006-07-18）〕
 - 25) 現職の図書館長はアールラム図書館の元レファレンス係員である。〔聞き取り：現在の図書館長（2004-03-29）〕
 - 26) 聞き取り：レファレンス係員（2004-03-29）
 - 27) Farber Faculty Development Fund は、前任の図書館長が1993年に退職した時に、図書館長の功績を称えて関係者が設立した基金 (endowed fund) である。〔聞き取り：現職の図書館長（2004-03-29）〕
 - 28) 演習コーナーを構成するのは、壁沿いに並んだLANに接続された15台のコンピュータ、投影机とスクリーン、中央の大テーブルである。学習・教育支援の実施時には演習コーナーを演習室として用いているが、それ以外の時間には学習用のスペースとして利用者に開放している。
 - 29) 電子メール：現職の図書館長（2006-07-18）
 - 30) 「course-related bibliographic instruction」は通常「学科関連の文献利用指導」と訳される。近年では、この形態の指導において、文献以外の情報も多く扱うようになっているために、本稿で

- は、bibliographic instruction を「情報利用指導」と訳している。
- 31) Farber, E. I. "Bibliographic instruction at Earlham College". *Bibliographic Instruction in Practice: A Tribute to the Legacy of Evan Ira Farber*. Ann Arbor, Pierian Press, 1993, p. 6.
- 32) 留学生や高等学校時代に図書館利用教育を受けなかった学生を中心に、毎年約 10% (約 30 名) の新入生が補講対象となっていた。〔聞き取り: 現職の図書館長 (2005-07-01)〕
- 33) 聞き取り: 現職の図書館長 (2005-07-01)
- 34) 聞き取り: 現職の図書館長 (2004-03-29)
- 35) 聞き取り: 現職の図書館長 (2005-07-01)
- 36) 6名のレファレンス係員のうち、2名が情報技術担当のレファレンス係員である(前掲 26))。他のレファレンス係員との違いは、通常の図書館業務に加えて情報技術関連の業務が業務内容に含まれていること、レファレンス・デスクの担当時間が他のレファレンス係員よりも短いことである。〔内部資料: レファレンス係員及び情報技術担当のレファレンス係員の業務規定〕
- 37) 内部資料: *Technology at Earlham-instructor Script: New Student Week*. 2003.
- 38) 内部資料: 学科関連指導の実施一覧: 2004年秋学期, 2005年春・秋学期, 2006年春学期. 2006.
- 39) Lilly Library. Richmond, Earlham College, 1993, p. 4.
- 40) 聞き取り: 複数のレファレンス係員 (2005-09-19~22)
- 41) 聞き取り: 現職の図書館長 (2005-09-23)
- 42) 聞き取り: レファレンス係員 (2004-03-29)
- 43) レファレンス係員は、これまでの経験をもとに、広範囲の情報探索を必要としないと判断できる科目(例として、教科書に重点を置く科目)を支援の対象外にする場合がある。〔聞き取り: レファレンス係員 (2004-03-29)〕
- 44) Course Resources. <<http://www.earlham.edu/library/content/resources/course/index.html>> [最終確認日: 2007-04-09]
- 45) 情報技術担当のレファレンス係員が担当する学科関連指導の 20% から 25% はソフトウェアの操作法指導である。〔聞き取り: レファレンス係員 (2004-03-29)〕
- 46) 聞き取り: レファレンス係員 (2004-03-29)
- 47) 学生は、初年次に「人文科学 A」及び「人文科学 B」を受講し、2 年次以降に「人文科学 C」を受講する。〔内部資料: *The Humanities Program at Earlham College 1997-1998*. Richmond, Earlham College, p. 1.〕
- 48) 「人文科学 A」及び「人文科学 B」の 6 つの小論文は、2 つの position papers (1 ページ構成)、2 つの connection/response papers (1 ページ構成)、2 つの longer papers (4~5 ページ構成) かなる。
- 49) このワークブックは図書館が「人文科学 A」において実施する情報探索演習のために作成した約 25 ページの冊子である。〔内部資料: *Humanities I: Search Strategy and Reference Sources (1994/1995 年度用)*. Richmond, Earlham Libraries. 25 p.〕
- 50) 聞き取り: 現職の図書館長 (2004-03-29)
- 51) このテキストには、文字情報だけでなく、映画、楽譜、美術工芸品も含まれる。
- 52) 観察記録: 「アラム・セミナー」における学科関連指導 (2005-09-19)
- 53) 内部資料: Hampton, Margaret. 2005・2006 年秋学期シラバス「*Bruised Identities: Vienna Circa 1900*」
- 54) 聞き取り: レファレンス係員 (2005-09-19)
- 55) 電子メール: 現職の図書館長 (2006-07-18)
- 56) データベースの検索法に関するワークショップとして、① DIALOG の利用法、② 各種データベースの利用法がある。①は DIALOG の無料サービスの開始 (1990 年) にあわせて実施したものである。〔Beth, A. and Farber, E. I. *Lessons from DIALOG: Technology impacts teaching/learning*. *Library Journal*. vol. 117, no. 15, 1992, p. 26-30.〕②は DIALOG のサービスを廃止し、多くのデータベースを導入した 2001 年に実施したものである。〔電子メール: 現職の図書館長 (2006-07-18)〕
- 57) 聞き取り: レファレンス係員 (2004-03-30)
- 58) 聞き取り: 前任の図書館長 (2004-05-19)
- 59) 内部資料: 新規採用教員の候補者のカレッジ訪問のスケジュール。
- 60) 聞き取り: 現職の図書館長 (2005-07-01)
- 61) 電子メール: 現職の図書館長 (2006-07-18)
- 62) 内部資料: 送付レターの原案: 2001 年 5 月 24 日送付。
- 63) 聞き取り: 前任の図書館長 (2004-05-19)
- 64) 聞き取り: 前任の図書館長 (2004-05-19)
- 65) 2001 年以降には、オリエンテーションの一環として、情報サービス関係の部局がコンピュータや教育工学関係の説明会を実施している。〔電子メール: 現職の図書館長 (2006-07-18)〕
- 66) 電子メール: 現職の図書館長 (2006-08-17)
- 67) 聞き取り: 現職の図書館長 (2005-07-01)
- 68) 聞き取り: 現職の図書館長 (2004-05-19)
- 69) 聞き取り: レファレンス係員 (2004-03-29)
- 70) 米国の大学は一般に夏期休暇中には大学教員の俸給を支払わない。夏期休暇中の教育改善ワークショップへの参加は教育活動への従事と判断されるために、参加者には、俸給を支払うことが必要になる。〔聞き取り: 現職の図書館長 (2004-03-29)〕
- 71) 観察記録: 教育改善ワークショップ (2004-05-18)
- 72) 内部資料: "How would you rate Earlham's

アールラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ

- libraries?”. *Library Management and Assessment*. 1999.
- 73) フォーカス・グループ・インタビュー (FGI) は、アールラム図書館がアールラム・カレッジの在大学生を対象に実施した図書館サービスに関する調査である (実施日: 1999年4月26日及び27日)。第1グループは4名の学生 (2名の心理学専攻者, 1名の英語及び生物学の専攻者, 1名の社会学及び文化人類学の専攻者) からなる。第2グループは6名の学生 (2名の心理学専攻者, 2名の英語専攻者, 1名の生物学専攻者, 1名の社会学及び文化人類学の専攻者) からなる。〔内部資料: Earlham College Libraries. Focus Group Interviews. 1999.〕
- 74) FGI: 心理学専攻の学生 A (1999-04-26)
- 75) FGI: 心理学専攻の学生 B (1999-04-26)
- 76) FGI: 社会学及び文化人類学専攻の学生 A (1999-04-26)
- 77) FGI: 学生 (専攻不明) (1999-04-27)
- 78) FGI: 学生 (専攻不明) (1999-04-27)
- 79) FGI: 英語専攻の学生 A (1999-04-27)
- 80) 72)の教員版〔内部資料: “How would you rate Earlham’s libraries?”. *Library Management and Assessment*. 1999.〕
- 81) 例として, Thompson, G. W. “Sequenced research assignments for the undergraduate literature student”. *Bibliographic Instruction in Practice: A Tribute to the Legacy of Evan Ira Farber*. Ann Arbor, Pierian Press, 1993, p. 41-50.
- 82) Stephen, W. K. “A departmental approach to bibliographic instruction”. *Bibliographic Instruction in Practice: A Tribute to the Legacy of Evan Ira Farber*. Ann Arbor, Pierian Press, 1993, p. 30.
- 83) Hall, B. W. “Bibliographic instruction in the Social Science”. *Bibliographic Instruction in Practice: A Tribute to the Legacy of Evan Ira Farber*. Ann Arbor, Pierian Press, 1993, p. 52.
- 84) 観察記録: 教育改善ワークショップ (2004-05-18)
- 85) 聞き取り: 教員 (2005-09-20)
- 86) 聞き取り: 教員 (2005-09-22)
- 87) 聞き取り: 教員 (2005-09-21)
- 88) 聞き取り: 教員 (2005-09-20)
- 89) 観察記録: 教育改善ワークショップ (2004-05-18)
- 90) 聞き取り: 教員 (2005-09-20)
- 91) 記述的ケース・スタディにおける理論構築のあり方については, 次の文献を参照した。Liphart, A. Comparative policies and comparative method. *The American Political Science Review*. vol. 65, 1971, p. 691.

要 旨

【目的】本稿の目的は、大学図書館の学習・教育支援機能を検討する一環として、米国のアールラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援の全体像を明らかにすることにある。アールラム・カレッジを研究対象とする主な理由は、アールラム図書館が1960年代から積極的に多様な学習・教育支援に取り組んできたこと、その取り組みが米国の多くの大学図書館に影響を与えてきたことにある。

【方法】研究の方法は、アールラム図書館が実施する学習・教育支援について詳しく説明する記述的なケース・スタディである。対象とするデータは、聞き取りによって得られた情報、資料記録、管理文書、事例報告、学術論文、物理的環境に関する情報、直接観察によって得られた情報である。

【成果】アールラム・カレッジが実施する学習・教育支援について次の特徴が明らかになった。学習・教育支援を始めた主な理由には、学生や教員の顕在するニーズや潜在的なニーズへの対応、カレッジが提供する学習・教育支援プログラムへの結びつけという特徴が見られる。主な実施方法には、印象づけの繰り返し、小論文を課した授業の支援という特徴が見られる。学習支援の評価について、特定の主題を扱った学習支援を評価する一方で、同じ説明の繰り返しや一般的な情報探索法指導の有用性への疑問もある。教員は、学習支援を受けた学生の情報活用スキルが向上し、課題の質が向上したことを評価している。教育支援について、教員は図書館やレファレンス係員の教育的役割を理解する機会を得たことを高く評価している。

今後の課題は、本稿の成果をもとに、大学の教育活動における教員と図書館員の連携に関する概念的枠組みを考案することにある。